

幽玄なるインカ帝国と高山病

諸 橋 毅 (もろはし つよし)

興亜開発株式会社 取締役技術部長

近代的な高層ビルの群立する都市, Amigo (アミーゴ), 「友人」という語で代表されるように年齢や地位よりも友情や信頼を重んじる都市。一方では, クルゼイロからクルザードさらに新クルザードへとコロコロ変わる貨幣価値, 100 ドルでも交換すれば財布に入りきらないほどの紙幣が渡される, インフレに悩む都市。第12回国際土質基礎工学会議の開催されたりオデジャネイロの錯そした経済・文化に酔いしれて, 学会Aコースツアーは8月19日午後, 次の訪問地ペルーへ出発した。

参加人員総勢18名(うち添乗員1人)で構成された本ツアーは, 声も顔だちも故林家彦六師匠を彷彿させる(?失礼多謝!)山川さん(土質工学会事務局局長)を団長格に, 8月10日の成田空港での結団式から, 「旅は道連れ……夜は酒」をモットーに, 分野, 年齢, 立場を乗り越えて, まさに ^{アミーゴ}Amigo のチームワークができ上がった。

目的である5日間のリオデジャネイロの会議を行程の真中にはさみ, 18日間にわたる我々のツアーが体験した数多くのイベントで, 参加者の多くが印象に残ったであろうペルーのインカ帝国の都市クスコおよびマチュ・ピチュについて感想をしたためさせていただきたい。

8月19日にリオデジャネイロからサンパウロを経由して, アマゾンの源流, アンデス山脈を眼下にペルーの首都リマ国際空港に到着したのは同日の夜9時半すぎであった。14時間の時差ボケはともかくとして, ツアー行程からしてもちょうど折返し点にあたる。我々の間には「熱燗にマグロの刺身」, いや「冷涼な流しそうめん」, ぜいたくは言わない「焼のりに納豆で満足」等々という会話が自然に交される食文化ギャップと体調, さらに何よりも次の訪問地が絶対に逃れられないという「高山病」への恐怖心, 等々の精神的重圧と疲労感がリマに近づくにつれて襲ってくる。

空港からホテルまでのリマの夜の市街地は真暗闇

である。民政化したとは言え, 反政府ゲリラの都市への爆弾テロはもち論のこと, 都市に供給する水力発電所への襲撃で都市の大規模な停電は日常茶飯事らしい。疲労感の上にさらに不安感がつくる。

五ツ星の近代的な高層ホテルとは言え, 自動小銃を抱えたガードマンにかもしだされた暗黒街的なムードで, 4時間ばかりの睡眠で, 翌早朝(8月20日)午前4時にコールをかけられた。

リマ発6時45分。無数のキズが傷々しいスリガラス化した窓の727機では空からながめるアンデス山脈もあきらめざるを得ない。約1時間ばかりのフライトで山も住宅も赤褐色の安山岩で色どられたクスコ空港に到着した。とにかく全員が寡黙である。前々日まで冗談話や掛け合い漫才的会話で抱えて笑いこけ合った Amigo ツアーも, クスコに到着したと同時に無言沈黙のムードに包まれる。そのうち, 何とはなしに気怠い不快感さえ覚えてくる。標高350mのリマから標高3400mのアンデス山脈の山間盆地クスコまで一挙に1時間足らずで自分の身を置いたならば, 当然空気が薄いために気圧の急激な低下が生じ, それに順応できない「高山病」である。その上, 前夜の寝不足と時差ボケも手伝って, ホテルの2時間程度の休息も効果はない。うつろな眼から顔面蒼白頭痛を覚える人, 一方では瞬時の気怠さを感じたものの「高山病薬」といわれるコカ茶(麻薬コカインの原料コカを煎じたもの)のサービスを受けてから元通りの体調を回復した人, と症状に2通りのタイプが現出した。前者は後者を非現代的メンタリティーの持主(?)かと疑いの^{まなこ}眼で, 後者は前者を哀れみと同情の^{まなこ}眼で, 山岳都市クスコでの我がツアーは何となく「高山病」症状の差異をめぐって錯綜したムード(?)がかもし出された。

15世紀の世界的な古代史としてはあまりにも有名なインカ帝国について, 筆者のたかだかの旅行パンフレット程度の知識では語ることはできない。

ただ, インカ人は壮麗な首都を築いただけでなく

同じ規模の地方都市を各地に建設して地方の民族を統轄し、その生産物をクスコに集中し、大々的に土木建築事業を展開した。当時のその事業の一端を目の前にして、その奥行きの深さには理屈もなく驚嘆させられたことである。標高 4 000m に及ぶアンデス山脈の険しい山麓斜面が切り崩され、多数の段々畑が開墾された。灌漑水路が縦横にめぐらされ、また水飲場、水浴場と上水道施設の原点もここに見いだすことができる。さらに、それ以上に土木・建築関連に身をおく我々の目を見張らされたのは構造物の精巧さ、雄大さならびに荘厳なことである。インカ歴代の皇帝の邸はもちろんのこと、宮殿および城塞など、石積を基本とした石造建築は一種独特の幽玄的な建築文化を漂わせるものである。特にクスコの石造建築で有名なのが第 6 代インカ・ロカ帝の宮殿跡の石積壁である。これは帝国初期のインカ建築を代表するもので、「12 角の石組」と称される 12 角の多面体石が寸分の狂いもなくピタリと組み合わせられている（口絵写真—27）。我が国の城壁のようにいわゆる単純な四面体の石組ではなく、あえてこのような多面体にしたのか理由は明らかではない。しかし、南米太平洋変動帯を代表する中央アンデス、それゆえ古代から地震の多発帯でもある。おそらく、インカ時代の征服者の権力の象徴思惑とは別に、当時の建築技術者の耐震性という知恵が身をもってこの石工技術に発露されたのではないだろうか。事実、16 世紀はじめインカを征服したスペイン人が建造したクスコのアルマス広場のバロック様式のメルセー教会は、17 世紀半ばの大地震で倒壊したのに対し、本旧殿はびくともしなかったことが記録されている。

高山病を避けられないクスコの訪問者の禁忌は飲酒と熱風呂とエネルギーギッシュな運動である。これは現地入りする前に我々をエスコートしてくれたペルーの在留邦人の鈴木さん（彼は 3 年間の海外青年協力隊の任務後、そのまま現地の自然と国柄にひかれ、現地の女性と結婚し、ガイドとしてペルーに在住している）から脅迫されて、フォルクローレの民族舞踊ショーがくり広げられるレストランでの晚餐はアルコールも進まず、いつもの冗談話も掛け合い漫才会話もでてこない。高山病の症状の軽い人も何か申し訳なさそうにビールをなめているようであった。

翌 8 月 21 日、インカ遺跡のメインイベントである



マチュ・ピチュ遺跡の見学へと我々は出発した。クスコ南方約 100 km に位置するマチュ・ピチュは標高 2 000m で、標高 3 400m のクスコからバスと電車で半日かけてゆっくりと下ることになる。気圧も酸素濃度も平地なみに回復し、体もそれに順応していく。極度の高山病で現代人のメンタリティーを苦しみながらも実証した吉岡さん（土質工学会事務局）、川田さん（阪神コンサルタンツ）、畑中さん（竹中工務店）なども途中のウルバンバ溪谷の荒々しい岩肌の景観に完全に元通りの体調に回復したようだ。

年間 2 万人、日本人だけでも 4 千人もの観光客が訪れるマチュ・ピチュ遺跡は切り立った花崗岩パソリス群の鞍部に築かれている。この遺跡はクスコを狙う敵に備える防塞であったという説と宗教的な目的のために、わざと山岳僻地につくられた聖都という説がある。クスコスタイルの精巧な石工技術によって築造された神殿、居住区、牢獄などが山間斜面に雄大な遺跡群として我々の目の前に現出する。

自然石をくりぬいた落ち着きのある階段、聖鳥コンドルを象徴した石像彫刻など、夕映えにかがやくこの偉大なる遺跡を前に（口絵写真—26）、誰しもが「15 世紀、スペイン人の征服によって潰え去った黄金帝国 100 年の栄光とは何であったのか」と気障な思いも決して気障ではない現実遭遇したのではないだろうか。

$\phi=0$ 条件で（気楽に？）書けという編集委員会からの御依頼を安請け合いしてしまい、その任に堪えるものではなかったことを後悔している。深くお詫び申し上げます。

最後に 18 日間の道中、人間味暖かなツアーを体験させてくれた A コースツアーの 17 名の Amigo（友人）に、また、各種機関の訪問に際し、我々のツアーを代表して御挨拶、御礼の言葉を述べていただいた土質工学会の山川事務局長に心より感謝致します。